

急性期病院で院内デイケアを開設した効果
～長期入院により認知機能に影響がみられた患者への介入事例～

主研究者：有本 まい

共同研究者：大峯 珠己、山崎 克仁、松下 理恵

1. 研究の背景

急性期病院は緊急性のある患者へ、高度で専門的な治療を提供する役割をもつ。緊急な状態への患者への業務を優先するために、認知機能の低下した高齢者へ個別性のある看護実践が手薄になることがある。山本は「一般病棟勤務看護師は、一般病棟で緊急性の高い患者に看護するなかでも高齢者特有の状況において対応しなければならず、ジレンマを感じ業務している¹⁾」と明らかにしている。急性期病院に入院する高齢者は、治療を優先するために自由に行動する機会が減少し、認知症の進行やADL低下に至る現状がある。相川は一般病院に入院する高齢者は「認知機能、意欲が入院時より退院時に有意に低下を認めた²⁾」ことを報告している。

超高齢者社会の到来により、急性期病院に入院する認知症高齢者の増加が予想され、当院では2022年度より認知症看護検討委員会を立ち上げ、講義や事例検討を通して認知症対応力の向上を目指した。そして、上記の現状を踏まえ院内デイケアを発足することとなった。看護師が認知機能の低下した高齢者へしっかりと向き合いながら、委員会で学んだ個別性のある認知症看護を実践する機会とし、認知症高齢者にその人らしく過ごしてもらうことを目的とした。

今回の症例であるA氏は、主疾患に対しての治療のために長期入院する必要があるがあった。入院期間が長くなるにつれ、表情や発語が乏しいまま無目的に歩き回り、趣味であったクロスワードにも興味を示さなくなり、認知機能低下が認められた。A氏は院内デイケアに参加しているときは、無目的な徘徊はみられず、他者へ興味を示し、笑顔で感情を表出する姿がみられた。最後の参加となった4回目の院内デイケアでは、その日のイベントのボーリングで優勝し涙を流しバンザイをする姿をみることができた。院内デイケアに参加してもらうなかで、A氏に良い変化を感じ取ることができた。当院の看護科委員会で取り組んだ院内デイケアがA氏へ与えた効果について検討し、院内デイケアの看護実践の発展へつなげたい。

2. 研究目的

急性期病院の看護科委員会で取り組んだ院内デイケアの看護実践が、長期入院により認知機能低下がみられた高齢者へ与えた効果を明らかにする。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

症例報告 後ろ向き研究

2) 用語の定義

院内デイケア：せん妄や認知機能低下をきたした患者を中心に、身体・認知機能の低下予防や情緒面の安定を図ることを主な目的とした集団ケアのこと。当院における院内デイケアは、月に2回（第2,4木曜日）13時から16時半に行う。全病棟に募集し、毎回5～7名の患者を対象に行う。

3) 研究の対象者

①対象患者：A氏 80歳代男性、食道狭窄にて入院。入院時の認知症高齢者の日常生活自立度Ⅰ。院内デイケア参加回数4回。

②対象患者が入院する病棟の認知症看護検討委員会の看護師（過去に委員会だった看護師も含む）3名

4) データ収集期間

①対象患者の入院期間：2022年8月18日～2023年8月3日

②対象患者が入院する病棟の認知症看護検討委員会の看護師：2023年11月1日～12月31日

5) データ収集方法

①対象患者：基本属性（年齢、性別、主疾患、入院期間、認定機能低下の程度、院内デイケア参加回数）と院内デイケア参加中の反応、院内デイケア参加後の病棟での様子は電子カルテより情報を得る。

②対象患者が入院する病棟の認知症看護検討委員会の看護師へ、基本属性（看護師経験年数、委員会担当期間）と看護科委員会で取り組んだ院内デイケア看護実践がA氏に与えた効果について半構造化インタビューを行う。

〈質問内容〉

A氏は院内デイケアに4回参加しました。院内デイケアはA氏にどのような効果をもたらしましたか？

6) データの分析方法

半構造化インタビューで得たデータは看護科委員会で取り組んだ院内デイケア看護実践がA氏に与えた効果の内容に着目し、コード化しカテゴリーを抽出する。電子カルテやインタビューで得たデータを院内デイケア実践者である認知症看護認定看護師2名と脳卒中リハビリテーション看護認定看護師1名により、看護科委員会で取り組んだ院内デイケアの看護実践がA氏に与えた効果を振り返る。

7) 院内デイケアでの認知症看護

①看護ケア導入の目的

A氏は食道狭窄を改善するために、バルーン拡張を数十回行う必要があり、食事制限をしながらの長期の入院生活を余儀なくされた。COVID-19の影響により面会制限もあり、外出や外泊も困難な状況にあった。また、転倒を繰り返していたことから、安全に治療を継続するために行動も制限されていた。A氏は入院の長期化とともに不穏行動がみられるようになり、入院9ヶ月後には認知症高齢者の日常生活自立度がIからIIへと移行した。また、元々寡黙で自己主張をしない性格であったが、入院10ヶ月後には、医療者へ怒鳴り、無表情で無目的に休みなく歩く行動が見られるようになった。A氏が趣味としていたクロスワードに取り組まず意欲低下が顕著になったことに、家族も認知機能の低下を心配するようになった。この現状を踏まえ、急性期病院でも様々な制限を緩和し、社会とのつながりを保ち、A氏らしく自由に過ごせる環境を整えることが必要だと考えた。病棟と相談し、本人と家族に許可を得て院内デイケアへの参加を促した。本事例の効果と課題を振り返り考察し、今後の院内デイケアの看護実践に活かしたいと考える。

②院内デイケアでの看護の実際

- ・自己紹介などの社会的な場面で自己表現をする機会を作る
- ・リアリティオリエンテーションで見当識障害を支える
- ・ラジオ体操やボール遊びを取り入れ、ADLの維持を目指す
- ・行動を制限せず、興味のあることに取り組んでもらう環境を作る
- ・集団でのレクリエーションで同年代の患者との交流を促す
- ・昔の仕事や生活の様子を事前に聴取し、会話に取り入れる
- ・アロママッサージを取り入れ気分転換を図る
- ・病棟へ院内デイ参加の様子を伝え、ケアやコミュニケーションに取り入れる